



夏目漱石の病歴と生活（五）

広島文化学園大学大学院看護学研究科

森下恭光

■ 緒言

第五稿となる本稿の主題は、明治四十四年一月より大正元年末日に至るまでの夏目の病歴と生活の実態を究明することにある。

この間、夏目の病歴としては、「修善寺の大患」の予後としての長与胃腸病院における入院生活と講演旅行中に発症し入院した大阪の湯川胃腸病院における入院生活、そして、帰京途中発症した肛門部の膿瘍の治療が主なものとしてあげられる。

一方、生活としては、夏目の生活に大きな影響を与えた事項として、博士の学位授与を辞退したこと。五女ひな子を急病で失ったこと。明治天皇が崩御されたことがあげられる。以上のことについて、病気については、夏目自身の手による書簡と日記を基本資料として検証し、生活については夏目の手によるものの他客観資料も用いて究明する。

■ 胃腸病院入院と博士問題

前年の八月二十四日夜八時に突然の大吐血（500グラム）があり、一時人事不省の事態に陥り、危篤と騒がれた夏目が、その生命の危機を脱し、同年十月十一日に、滞在していた伊豆修善寺温泉の菊屋旅館を出て帰京する。

しかし、帰宅ということではなく、麴町区内幸町にある長与胃腸病院に入院したことは、前稿に記述したとおりである。

この年（明治四十四年）は、前年入院した長与胃腸病院で迎えることになった夏目は、印刷された年賀状の他に手書きの葉書及び書簡を連日とは言わないまでもかなり頻繁に書き送っている。そのことから夏目の病状は安定期にあることが察しられる¹⁾。

とくに、一月二十日には、手紙を二通、葉書（(注)ドイツ滞在中の寺田寅彦宛）一通²⁾を出している上に、その内容も決して形式的とは言えないものであることは、精神面における回復も暗示しているように思われる。

二月十日付で妻の鏡宛に書き送った文面には夏目本来の諧謔が表現されている。文中に病院長の平山金蔵との談話を記述し、自身を旦那様として「もう腹で呼吸をしても差支ないでしょうか」と病院長にたずねたのに対し、病院長が「もう差支えありません」と答えたこと。また、「では少し位声を出して、一たとえば謡などを謡っても危険はありますまいか」とたずねたところ「もう可いでしょう。少し習らして御覧なさい」³⁾と答えたこと、そして、それは看護婦の町井いし子が保証することであることなど、その場の情景を知らしめる調子で描写している。

もりした やすみつ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学大学院看護学研究科

ここに見られるように夏目の病状は安定し、確実に快方に向かい、退院も間近になっていた。

そのような時期に、妻の鏡子の述べるところによれば、「たしか二月二十日のことだったと覚えておりますが、自宅の方へ文部省から手紙が参りまして明日の午前十時に学位の授与があるから通常服で出頭せよ、もし差支があれば代人を差し出せという達しが参りました。」⁴⁾ という。

このことを鏡子は早速電話で入院中の夏目に連絡する。これに対する夏目の対応は次のとおりであった。二月二十一日付で文部省専門学務局長福原録二郎に宛てた書簡には次のように記されている。

「拜啓昨二十日夜十時頃私留守宅へ（私は目下表記の処に入院中）本日午前十時学位を授与するから出頭しろと云う御通知が参ったそうであります。留守宅のものは今朝電話で主人は病気で出頭しかねる旨を御答えして置いたと申して参りました。中略。然る処小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしで暮したい希望を持って居ります。従って私は博士の学位を頂きたくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願ったりするのは不本意であります右の次第故学位授与の儀は御辞退致したいと思ひます。宜敷御取計を願ひます。敬具」⁵⁾

文面にあるとおり、夏目は博士の学位授与を辞退する旨を明確に示し、同時に、その理由と、辞退することによって発生する迷惑、面倒などにも触れて、いわば十分に配慮を施した内容構成で当局の責任者宛に書簡を送ったのであった。

この後約一週間後の二月二十六日に夏目は長与胃腸病院を退院する。三月四日付で畔柳都太郎に宛てた葉書に「二十六日漸々退院致候」⁶⁾ と書き送っていることでそれは確認される。

無事退院した夏目は博士の学位授与の方も決着がつくものと予想したのに反し、文部省の対応は夏目の予想に反するもので、学位の授与辞退は学位令の解釈上認められず、従って学位記を返戻されても学位授与の事実は動かないとする文部省の見解が四月十九日付の文書によって伝えられる⁷⁾。

ここに記した夏目の博士の学位授与辞退は、世間の注目するところとなった。そのことを小宮豊隆は「漱石が博士を辞退し、それに就いて文部省と漱石との間に暫くの間ごたごたが続いた事は、世間の耳目を聳動し、賛否さまざまの批評を惹き起こした。ある者は是を痛快だと言って褒め、ある者は是を神経質に過ぎると言って嗤った。」⁸⁾ と概括している。

博士の学位辞退より発生した諸事象は、夏目の健康上に大きな影響を及ぼす結果にはならなかった。

その後、五月二十四日の日記に「昨夜十一時頃謡曲から帰ると、純一が頭が痛いと言つて、氷を載せている。時々痙攣があつて脳膜炎の様だと。事。医者をどうしようかと考えたが、様子が少しいゝ様だから見合わせたのだと云う。心配でならないが寝た。」⁹⁾ との記述がある。幸い翌日には回復し、安堵したものの、その日純一は第3号のデフテリヤ血清、免疫1500を射ってもらっている¹⁰⁾。

暫く後の七月下旬に大阪朝日新聞社より講演の依頼があり、妻の鏡子は健康を案じるが、義務感に駆られ参加を受諾する¹¹⁾。

■ 講演旅行と体調不良

夏目の行った講演は、八月十三日に明石市内で行った「道楽と職業」¹²⁾、八月十五日に和歌山市で行った「現代日本の開化」¹³⁾、八月十七日に堺市で行った「中味と形式」¹⁴⁾ と、隔日ごとに行われたが、堺市での講演を行う時点で胃の不調を自覚し、翌日の八月十八日に大阪市内で「道徳と文芸」¹⁵⁾ を講演する頃には服薬して臨む程の不調であった。そして、終了後紫雲楼で寝ている時、嘔吐し吐血する¹⁶⁾。

八月十九日、講演の日程を消化したこともあり、地元北浜の湯川胃腸病院に入院する。湯川玄洋が院長を勤めるこの病院は胃腸病院として著名であった。翌日の二十日、夏目は絶対安静を言い渡される。この事実から、夏目の講演旅行は、その肉体にとって過酷なものであったことが推測される。

この間に夏目の残した日記を見ると、講演旅行に出発の八月十一日から十六日に講演を行う最終地の大阪に到着する迄は胃の不調を伝える記事は全くない。しかし、十七日より日記は全く記されず、十一月十一日までそれはつづく。理由は不明であるが、異例のことと言つてよい。

一方、書簡の方は、湯川病院に入院中の九月八日、ドイツより帰朝した寺田寅彦に宛てて葉書に病院の三階に寝ていることを告げ、「早く東京へ帰りたい。」¹⁷⁾ と心境を伝えている。この頃になると夏目の

症状も安定していたという背景があって、「早く東京へ帰りたい」という気持ちをいただいていたのであろう。それから約一週間経た九月十三日、夏目は鏡子夫人に付添われ、寝台車で大阪を発つ。約一ヶ月の入院生活であった。

車中、夏目の体調は良好とは言えず、入院中からつづく肛門部の不快感に悩まされる。

帰宅後の九月十五日、自宅で往診を受けた医師佐藤恒祐によって肛門周囲膿瘍と診断される。充分化膿させてから小切開するのがよいと告げられた夏目は、自宅での治療を希望する旨伝える¹⁸⁾。

九月十六日、佐藤医師の往診を受け、コカイン麻酔で大きく切開してもらう。佐藤医師の往診はその後もつづく。夏目が十月十一日付で金子健二に送った書簡に、「今に猶治療中なれど大分快よくそろそろ戸外を歩くように相成候につき」¹⁹⁾との文言があることにより、ようやく快方に向かっていることが知られる。

しかし、完治するにはなかなか至らず、十一月二十二日付で野村伝四宛に送った書簡にも「痔が癒り損なって未だ尻に細い穴が出来ている。」²⁰⁾と記しているとおり、夏目からすれば癒り損ない、容易に結着のつかない病いという印象であったことが知られる。

そのような時期に、夏目に想定もしなかった不幸が突然に発生する。五女ひな子²¹⁾の急死である。

■ 五女ひな子の死

その不幸は十一月二十九日に突然起こる。十一月二十九日の日記によれば、「日暮中村翁来。談話中小供が3人廊下を馳けて来て笑いながら一寸来て下さいという。大方ひな子がひき付けたのだろうと思って六畳へ行って見ると妻が抱いて顔へ濡れ手拭などをのせている。唇の色が蒼い。然しよくある事だから今に癒るだろうとと思っていると、いつもと様子が違うというので前の中山さんと呼ばにやった所で、丁度下女があわて、帰って来た所であった。中略。中山さんがやって来たが、何だか様子が可笑しいから注射をしましょうと云って注射をしたが効目がない、肛門を見ると開いている。眼を開けて照らすと瞳孔が散っている。是は駄目ですと手もなく云って仕舞う。何だか嘘の様な気がする。」²²⁾ 夏目の臨場感が漂う描写記述によって、幼女の死が突然に、しかも原因の分からない形で発生したものであることがわかる。

文中に、夏目の子ども3人が来客中の書齋にやって来て「笑いながら一寸来て下さいという」との記述のあるのは、事態の性質上、きわめて奇異な行動と思われるが、夏目家にとっては決して奇異な行動ではないことは、子ども、とくにひな子のひきつけはよくあることだからということ、他の子どもにも夏目にもよく分かっていたからこその対応であることを知るならば、一応理解はできる。鏡子夫人の語るによれば、ひな子に限らず上の男の子（注 伸六のことか？）²³⁾でも疳が強くひきつけることがしばしばあったという。とくにひな子は前に4、5度ひきつけたことがあったため、当初は「又かたいたして驚きもせず子守が万事のみこんで水を吹きかけ」²⁴⁾るといふ処置をとったという。ところがいつものように息を吹き返さないで、子どもに夏目と呼ばにやらせたというのが実情であったらしい。

したがって、その時点では、鏡子夫人にしても子どもに呼びに行かせれば済むと考えていたであろうことは容易に察しられる。

わが子を突然に原因不明の急病で失うという事態は、自身が胃や肛門の病気に悩まされつづけている夏目にとっては大きな衝撃であり、回復可能な病気と異なり、回復不可能なこととして、夏目の心身に大きな傷を加えることになった。

ひな子の死にかかわる記事が記される日記は、十一月二十九日に始まり、三十日、十二月一日、十二月二日、三日²⁵⁾（この日の記述は約2400字に及ぶ）、四日、五日と7日間に及んでいる。

とくに、三日の記述の中には「自分の胃にはひびが入った。自分の精神にもひびが入った様な気がする。如何となれば回復しがたき哀愁が思い出す度に起るからである。」²⁶⁾と愛児を突然に失った親の耐え難い嘆きを表すことばが連なっている。

五日には、本法寺へひな子の骨を納め、二十九日から数えて7日目になるので、この日の日記の最後に「是で一段落ついた。」²⁷⁾と記す。

この日以降、ひな子の死についての記述はほとんど見られなくなる。そして、十二月十一日には、「あい子、純一風邪」²⁸⁾があり、十二日には自身について「痔瘻の分泌少なくなる。大分の抵抗力を押し切つてより膏薬を入れても痛からず却って心地よし。」²⁹⁾と記す。

十四日の日記に「昨夜ストーブを焚き小供と唱歌をうたうもういくつ寝ると御正月という唱歌である。」³⁰⁾とあるのは愛児を失なった深い悲しみの中にある夏目であることを考えると、通常の親子で童謡を唱うのと異なり、団欒の風景としては想像できない。そして、この年最後の日記になる十五日の記述には、「今日から小説を書こうと思ってまだ書かず。他から見れば怠けるなり。終日何もせざればなり。」³¹⁾と記す。当時の夏目の境遇やそれに伴う心境を考量するならば、小説を書かなければという義務感があっても、それがなかなか実行に移せない状況にあったことは容易に理解できる。しかし、義務感の強い夏目は、いかなる事情があっても創作という彼の本質にかかわる活動を怠ることなく、年末には小説『彼岸過迄』を起稿する。それは、十二月二十八日頃であったとされる³²⁾。

■ 『彼岸過迄』に見る愛児の死

小説『彼岸過迄』³³⁾は、明治四十五年一日二日より『東京朝日新聞』・『大阪朝日新聞』に掲載される。連載は四月二十九日までつづく。大正三年十二月二十八日印刷、大正四年一月一日発行の単行本『彼岸過迄』には、「此書を亡児雛子と亡友三山³⁴⁾の霊に捧ぐ」と記され、序文の部分に、「題名は、元日から始めて彼岸過迄書く予定だから単にそう名づけた迄に過ぎない」³⁵⁾とある。

この年の始めの夏目の健康状態はどうであったか。その前に書簡集を見てやや不審に思うのは、一月一日に印刷された年賀状を2通出していることである。もちろん、添えられた手書きの文面に新年を賀する内容は無い。

愛児を失った父親として喪にふくすということはないのであろうか。それはともかく、健康面について見ると、この時期は五月まで全く日記をつけていないので、書簡によって調べると、夏目自身の体調不良を伝えるものは見られない。新聞連載を始めた立場からしても原稿を書けないような健康状態に陥ることは絶対に避けなければならない。その気構えと配慮は、一月二十八日付で鳥居赫雄宛に送った書簡に、「病余自分の健康を気づかひわざと毎日一回分の小説外か書かざる為其日其日に追われ落付きかね候」³⁶⁾とあることによってもうかがわれる。

夏目の健康についての意識は、他者のそれに対しても向けられ、三月十三日付で野上八重³⁷⁾に送った書簡には、「野上君³⁸⁾（(注)豊一郎）の御病氣（(注)腸チフス）は驚ろきました」³⁹⁾と記し、「もし何か手が足りないとか何とかいう場合に私の出来る事なら仕上げてますから遠慮なくそういつて御寄こしなさい。」⁴⁰⁾とまで言い添えている。野上八重にしても、その夫豊一郎にしても、いわば門下生としての位置づけにある2人であるだけに特別の配慮を見せているのではあるが、度々、胃腸病その他の病気に悩まされつづけている夏目にすれば病気に苦しむ境遇に置かれた者に対する配慮は格別のものがあつたはずである⁴¹⁾。

他の一例としては、歌人の長塚節が喉頭結核を患い、治療を受け退院後、九州地方に出掛けることを知り、福岡医科大学の久保猪之吉医師に宛てて三月十七日付けで「是非共貴所の診察を受け度希望の由にて小生に紹介を依頼致し候」⁴²⁾という理由で懇談したこともないという相手に対して紹介状を書き送っていることがあげられる。

さて、そのような夏目自身にとっては健康上の問題もなく書き進められた『彼岸過迄』は、短篇を重ねて一つの長篇にするという構想のもとに創作されており、その第四篇にあたる作品に「雨の降る日」⁴³⁾と題する作品がある。この作品は、岡本というこの篇の中心になる人物が、雨の降る日の面会は断るという習慣をもっており、その理由は何かを探ることが主題になっている。その理由を松本の姪にあたる千代子が松本自身から聴き出すということになり、千代子は松本から直接その理由を聴き出し、その内容が雨の日の面会を松本が断る理由の解明につながるという構成になっている。

結論はこうである。松本は雨の降る日に、それは千代子が松本宅を訪ねた日でもあつたのが、松本が最も愛し、そして、千代子もとくべつに可愛がっていた宵子、それは彼女が雛の節句の前の宵に生まれ

たからそう名付けられたのであるが、その宵子を突然に失う。

千代子と共に食事をとっている最中に、宵子は突然発作を起こして、そのまま絶命する。

その悲劇が起きたのが正しく雨の日であったから、その事を想起させる雨の日の来客は断る、というのである。

「己は雨の降る日に紹介状を持って会いに来る男が厭になった」⁴⁴⁾ という松本のことばでこの一篇は終わっている。

先に記したように『彼岸過迄』は「此書を亡児雛子と亡友三山の霊に捧ぐ」ものとして制作されたものであるから、作中の宵子が夏目の五女ひな子であることは明らかである。そのことを諒解して読むと松本の宵子に寄せる思いは夏目のひな子に寄せる思いをそのまま表現したものであると考えるのが自然である。もっとも、作中の千代子にあたる人物がこのことに関して現実に存在したかといえ、それは否定せざるを得ない。作品の構成上、聴き出し役が必要と考えられた上での設定であると考えられる。

「雨の降る日」については、三月二十一日付でひな子の急死した日に来訪中であつた中村霧に宛て、
「『雨の降る日』につき小生一人感慨深き事あり、あれは三月二日（ひな子の誕生日）に筆を起し同七日（同女の百ヶ日）に脱稿、小生は亡女の為好い供養をしたと喜び居候。」⁴⁵⁾と書き送っている。

この後、四月も末に近い四月二十七日、腸チフスで入院していた野上豊一郎の退院を祝う書簡を本人に宛て、送っており、その中に自己の体調について次のように記述している。「此二三週間は又胃に酸が出て運動すると形勢不穩故成るべく静養の工夫致し候 夫に神経もよろしからず閉口致し候。けれども根が呑気な生分故まあどうかなるだろうと存居候。」⁴⁶⁾

夏目がこの書簡を認めた四月二十七日は、二日より連載が始まった『彼岸過迄』が終る四月二十九日を間近に控えていることを考慮に入れて、その内容が意味するところを測る必要がある。すなわち、胃に酸が出て不調であり、神経もよろしくなく閉口していると告げながら、根が呑気な性分であると自己を分析していることに見られる不自然さは、作品の完成を間近にしているという安堵感が作用しての結果と考えることもできる。しかし、仮にそうであったとしても、胃の不調と神経のいらだちは現実に起きていたものと考えないわけにはいかない。

『彼岸過迄』の連載が終了した後、暫くは、自身の健康について触れる内容は、五月より書き始めた日記にも、また、手紙にも見られない。のみならず、六月三日付で中川芳太郎に宛てた書簡には、「此手紙は朝から五本目でいかなひま人も五本ものべつに手紙をかくといや（に）なる甚だ失礼だが是で御蒙る」⁴⁷⁾と記している。実際に、この日には中川の他に四人に宛てて葉書ではなく書簡を書き送っている。いずれも長文ではないが、身体が不調であれば敢えてすることではないはずであることから、この時期の夏目の健康状態に特別の問題はなかったと見えることができる。

■ 明治天皇の崩御

ところが、夏目が強い関心を持つ出来事が七月二十日に突然起こる⁴⁸⁾。それは夏目の日記に次のように記述される。「七月二十日（土）晚天子重患の号外を手にする。尿毒症の由にて昏睡状態の旨報ぜらる。」⁴⁹⁾しかし、夏目の日記に見られる次の記事は、意外なもので「川開きの催し差留られたり。天子未だ崩ぜず川開を禁ずるの必要なし。細民是が為に困るもの多からん。当局者の没常識驚ろくべし。中略。天子の病は万民の同情に価す。然れども萬民の營業直接天子の病気に害を与えざる限りは進行して然るべし。」⁵⁰⁾と記す。そこに見られるのは夏目の思考・判断に見られる合理性である。その合理性は、この件に限らず、いわば夏目の思考・判断形式にしばしば見られるものである。

もちろん、天皇の重患について夏目が心を傷めていることは、七月二十五日付で橋口貢に送った書簡の中に、「聖上御重患にて上下心を傷め居候今朝の様子にては又々心元なきやに被察洵に御気の毒に存候」⁵¹⁾とあることによっても疑う余地はない。そして、終に天皇崩御のその日、七月三十日の日記には、「午前零時四十分、陛下崩御の旨公示。同時踐祚の式あり。」⁵²⁾と記す。次いで三十一日には「改元の詔書あり」⁵³⁾に始まり、詔書の転記、先帝の御諡号（（注）明治天皇）、朝見式詔勅の転記が行われている。さらに、大正元年七月三十一日の日記には、齋藤海軍大臣及上原陸軍大臣に贈った詔勅の転記、それに対する陸・

海軍両大臣の奉答の転記、朝見式勅語に対する西園寺首相の奉答の転記、三十一日排訣式並に納棺式の紹介など相当量の記述がなされている。ここまで詳細克明に、いかにそれが天皇崩御にかかることであるとはいえ日記に記述する者は稀であるはずである。その点にも夏日の天皇崩御への関心の強さがうかがわれる。

ところが一方では、八月八日付で森次太郎に宛て、送った書簡には「諸新聞の天皇及び宮庭に対す（る）言葉使い極度に仰山過ぎて見ともなく又読みづらく候」⁵⁴⁾と記す。

■ 漱石における孤独

健康上の問題を訴えることが暫く見られなかった夏目があったが、八月十二日付で森成麟造へ宛て、送った書簡に「私は須賀さんにかゝっています。日に六回づつ薬を飲みます三回にしたらどうも具合が悪くなったので又逆戻りです何うも少し活動をするに宜しくありません何かもう長くはないような気がします。中略。大分患者が殖えましたか」⁵⁵⁾と記している。「大分患者が殖えましたか」の文言で相手が医者であることは明らかで、森は夏目がいわゆる修善寺の大患で生死の間を往復した折に最も尽力した医師である。相手が森であるからこそ「日に六回づつ薬を飲みます」と記すだけで夏目の健康状態は容易に伝えわたったはずである。すなわち夏目の特病である胃病の程度は伝わったはずである。

八月二十六日付で軽井沢に滞在中の夏目が鏡子夫人に宛てた書簡には「身体は至極無事なれば御休神被下度候」⁵⁶⁾と書きながら、すぐその後で馬に乗ったところ動揺のために胃に酸が出てガスが発生し多少の苦痛があったとも書いている。一見矛盾する記述に見えるこの内容は、夏目にとっては矛盾ではなく、この程度のことは日常事であるから「至極無事」ということになったということであろうか。

この段階での夏目は、入院治療を要する状態にはなかった。しかし、九月二十九日付で小官豊隆宛に送った書簡は佐藤医院より発信されている。「御尻は最後の治療にて一週間此所に横臥す」⁵⁷⁾とあることによって肛門手術のため入院中であることが判明する。更に、同日付で松根豊次郎に送った書簡に「二十六日最後に御尻を切り其俣還らず此所に寝ている一週間にて退院の筈」⁵⁸⁾と入院期間まで告げている。実際に入院期間は約一週間であったことが十月二日付で笹川種朗へ宛てた書簡に、「明日帰宅致し候」⁵⁹⁾とあることによって明らかである。退院後の夏目は十月六日付で山本裕之助宛に書簡を送り「小生は病氣も大分宜しかるべくと存候」⁶⁰⁾と記している。

しかし、通院はつづいており、十月十一日付で寺田寅彦に送った葉書に、寺田に会う前に「神田錦町の医者（(注)佐藤医院）」に寄って行くことが記されている⁶¹⁾。

肛門の手術で入院、そして通院する夏目であったが、十月十二日付で阿部次郎に宛てた書簡に「私は近頃孤独という事に慣れて芸術上の同情を受けなくてもどうか斯うか暮らして行けるようになりました」⁶²⁾と記している中で「孤独」ということばがあるのは、この時期の夏目の精神状態を暗示するもののように思われる。

一方、慢性的に胃病に悩む夏目は、十月三十日付で寺田寅彦に宛てた諸簡に「此間帰ってから今日まで寝て暮し申候あの夜は胃がつっぱって弱り候其後は横着の引続きにて人間並に行動す（る）のがいやになりたる故兩三日人間を辞職致したる訳に候」⁶³⁾と記し、時折発症する胃痛の苦しみを近い関係にある寺田に訴えている。

文中にあるあの夜が何日のことであるのか判然としないが、寺田と行動を共にしたから「あの夜」と書けば寺田には通じるということであろうが、それが仮に十月十二日であったとすると、胃痛に苦しんだ日数はかなり長いことになる。

ところで、十月十二日付けの阿部次郎宛の書簡にあった「孤独」ということばは、その後どのような形で表出されているのであろうか。

十一月三十日より起稿された『行人』⁶⁴⁾は、その主人公である大学教授長野一郎の孤独感が主題になっているのは、この時期における夏目の心境と無縁であるとは考えにくいので、その意味においても「孤独」ということばの夏目における展開が注目される。

十二月四日付で津田亀次郎に宛て、送った書簡に、「芸術家が孤独に安んぜられる程の度胸があったか

ら定めて愉快だろうと思います。中略。私は孤独に安んじたい。』⁶⁵⁾と記している。ここに記されているのは芸術家としての孤独であるが、人間即芸術家ではなくても、芸術家即人間とは言えるであろうから、夏目という芸術家の孤独は人間としての夏目の孤独になると考えることができる。

十二月二十六日付で沼波武夫に宛てた書簡に「大兄は自己を孤立と仰せられ候が孤立の意味はよく承知致居候小生もあなたに劣らぬ孤立ものに候」⁶⁶⁾とあるところを見ると、夏目は自身を孤立者として意識していることがわかる。しかし、本来、孤立は事実としてある状況があって、それを意識した時に孤立感が発生すると考えられる。そう考えた時、夏目に孤立しているという事実があったであろうか。疑問が残るところである。しかし、夏目は自身を孤立者と意識している。夏目においては、「孤立」も「孤独」も意識としてあることばであるように考えられる。

年末に向けて孤立感、孤独感を深めて行く夏目を鏡子夫人は、「暮れから妙に顔が火照っててかてかしている」⁶⁷⁾とその外見的特長によってとらえている。そして、鏡子夫人は、その外見上の特色を夏目が精神面の異常へ向かう予兆としてとらえるのである。

■ 結 語

本稿によって明らかにし得た主な点は次の四点に終約される。

第一点は、明治四十四年より大正元年に至る間に見られる病歴は、その日数においては短期間とは言えないが、その深刻度を見る限り、生命の危険に瀕する程のものは無かったこと。

第二点は、博士辞退の問題は、夏目自身にとっては当然の対応として意識されていたこと。

第三点は、五女ひな子を急病によって失ったことは、夏目にとっては、その心身に深い傷を負わせるものであったこと。

第四点は、明治天皇の崩御は、明治時代の終わりを象徴する重大事⁶⁸⁾と意識されたこと。

以上の四点の中で第三点にあげた愛児の急死は夏目個人にとって最も深刻な意味を持つものであったことは特に記しておかなければならない。

注

- 1) 夏目の長女筆子によれば、修善寺の大患以後、気持はずっと落ち着いて来たのか。何をしても怒らない、それはそれは優しい父になったという。半藤末利子、漱石の長襦袢、平成21年、235ページ参照。
- 2) 夏目漱石、書簡、漱石全集第30巻所収、岩波書店、昭和55年、6～7ページ。
- 3) 同前書、11ページ。
- 4) 夏目鏡子、松岡譲筆録、漱石の思ひ出、角川文庫、昭和36年、53～54ページ。
- 5) 夏目漱石、書簡、前掲書、13～14ページ。
- 6) 同前書、17ページ。
- 7) 夏目鏡子、松岡譲筆録、漱石の思ひ出、前掲書、58ページ。
- 8) 小宮豊隆、夏目漱石、岩波書店、昭和24年、700～701ページ。
- 9) 夏目漱石、書簡、前掲書、28ページ。
- 10) 同前書、29ページ。
- 11) 荒正人、増補改訂漱石研究年表、集英社、昭和59年、685ページ。
- 12) 夏目漱石、道楽と職業、社会と自分所収、実業之日本社、大正5年、1～42ページ。
- 13) 夏目漱石、現代日本の開化、同前書所収、43～87ページ。
- 14) 夏目漱石、中味と形式、同前書所収、88～125ページ。
- 15) 夏目漱石、道徳と文芸、同前書所収、126～166ページ。
- 16) 荒正人、前掲書、692ページ。
- 17) 夏目漱石、書簡、前掲書所収、53ページ。
- 18) 荒正人、696ページ。

- 19) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 59ページ。
- 20) 同前書, 69ページ。
- 21) 夏目の五女ひな子(雛子)の名は, 誕生日が3月の節句であることから森田草平が提案したのを夏目が採用したという。森田草平, 続夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和18年, 718ページ参照。
- 22) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第26巻, 岩波書店, 昭和54年, 75ページ。
- 23) 夏目漱石には長男純一, 次男伸六の男児2名あり, 2人ともひな子の上にあたる。
- 24) 夏目鏡子, 松岡譲筆録, 前掲書, 80ページ。
- 25) 夏目漱石, 日記, 前掲書所収, 78~80ページ。
- 26) 同前書, 80ページ。
- 27) 同前書, 82ページ。
- 28) 同前書, 84ページ。
- 29) 同前書, 84ページ。
- 30) 同前書, 85ページ。
- 31) 同前書, 85ページ。
- 32) 荒正人, 前掲書, 708ページ。
- 33) 夏目漱石, 彼岸過迄四篇, 大正9年, 春陽堂, 1~898ページ。
- 34) 三山は池辺三山を指す。夏目が朝日新聞社に入社の決意をした契機になった人物であるが, 明治45年に没する。
- 35) 夏目漱石, 彼岸過迄四篇, 前掲書, 5ページ。
- 36) 夏目漱石, 書簡, 前掲書所収, 74ページ。
- 37) 野上八重(子)は野上弥生子の初期筆名であり, 本名はヤエ。主な作品に「真知子」,「逆路」がある。文化勲章受章。
- 38) 野上豊一郎は弥生子の夫で, 法政大学長になる。能の研究で新分野を開く。
- 39) 夏目漱石, 書簡, 前掲書所収, 77ページ。
- 40) 同前書, 78ページ。
- 41) 半藤末利子。漱石の長振祥, 文芸春秋, 平成21年, 243ページ。(夏目の長女松岡筆子の談話にある。)
- 42) 夏目漱石, 書簡, 前掲書所収, 79ページ。
- 43) 夏目漱石, 雨の降る日, 彼岸過迄四篇所収, 前掲書所収, 263~297ページ。
- 44) 同前書, 297ページ。
- 45) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 81ページ。
- 46) 同前書, 88ページ。
- 47) 夏目漱石, 書簡, 前掲書, 99ページ。
- 48) 侍医頭岡玄卿の記す「先帝御病歴」によれば, 明治天皇が明治45年7月19日になって急性腎臓と尿毒症を併発され, 翌20日早朝には, いよいよ重患に陥られたため, 大学(東京帝国大学)の青山, 三浦岡博士が召される事態となった。(『先帝乃御雄図』大正図書出版, 大正元年, 292~294ページ参照)
- 49) 夏目漱石, 日記, 前掲書所収, 99~100ページ。
- 50) 同前書, 100ページ。
- 51) 夏目漱石, 書簡, 前掲書所収, 107ページ。
- 52) 夏目漱石, 日記, 前掲書所収, 101ページ。
- 53) 同前書, 101ページ。
- 54) 夏目漱石, 書簡, 前掲書所収, 110ページ。
- 55) 同前書, 115ページ。
- 56) 同前書, 118ページ。
- 57) 同前書, 131ページ。
- 58) 同前書, 132ページ。

- 59) 同前書, 132ページ。
- 60) 同前書, 134ページ。
- 61) 同前書, 136ページ。
- 62) 同前書, 136ページ。
- 63) 同前書, 139～140ページ。
- 64) 夏目漱石, 行人, 漱石全集第11巻所収, 岩波書店, 昭和54年, 5～335ページ。
- 65) 夏目漱石, 書簡, 前掲書所収, 152ページ。
- 66) 同前書, 155ページ。
- 67) 夏目鏡子, 松岡譲筆録, 前掲書, 99ページ。
- 68) 江藤淳, 夏目漱石小伝, 文芸読本夏目漱石所収, 河出書房新社, 昭和50年, 28ページ。江藤は、『こころ』の主要人物「先生」の自殺は明治天皇の崩御によって終わった「明治の精神」に殉ずることにあつた, ととらえる。

追記

引用文中の旧漢字, 旧仮名は一部を除き新漢字, 新仮名に改めたことをことわっておきたい。